

神奈川を掘る

玉川文化財研究所 研究論集 2015



神奈川を掘る

玉川文化財研究所 研究論集 2015

序 文

玉川文化財研究所は、1980年横浜に於いて発足し、本年で35周年を迎えた。当初7名であった陣容はほどなく30名体制となり、今日まで変わらない。

この間、約700箇所を数える遺跡の発掘調査と遺物整理に立ち向かってきた。おそらく日本の遺跡調査組織としては、最も多くの遺跡を手がけたと言えるのではないかと思う。

調査を行った遺跡は丘陵上、台地上、急斜面、断崖、谷戸、川底、低湿地、海岸と、様々な地形上に存在しており、旧石器時代から近・現代までのあらゆる種類に属す遺跡が対象となっている。また暑さ、寒さの中での屋外調査という条件の中で細大もらさず遺構検出につとめ、消滅寸前の遺物を取りあげ、そのうえで最終記録となる調査報告書の作成に全力を投入してきたのである。ちなみにこれまで執筆した報告書の総数は550編を超えた。

さらに都、県で行われる遺跡調査発表会、後には市町村においても調査発表会が年間のスケジュールとなって行われることとなり、私どもの発掘した遺跡の中で考古学的耳目を集めた調査はほとんどと言って良いほど内容発表を行ってきたのである。

このように発掘と報告書作成の日々を過ごす中で、研究所としての発行物、例えば所報であり、研究誌のようなものを出されては、という研究仲間の方々からの暖かい御提案をいただくこともあったが、千差万別の遺跡のあり方と取り組む中で、未熟な発掘調査人としての自己研鑽が先で、論考めいた発表は10年早い、として胸の奥にとじ込めておいたのであった。しかしそのこととは別に35年の長きにわたって行ってきた調査事例の中には、調査者として考察を行わなければならない遺構・遺物がありながらも報告書発行の時間的制約からそれがはたせなかった遺跡もあり、いつかその機会を作りたいと考えていたことも確かであった。

考察を行う必要性については、報告書刊行時に調査者として知り得た新知見を、いち早く指摘し、注意を喚起するところにあると考えるが、報告書刊行後に

他の調査事例を加え、改めて考古学上の問題点が浮上してくる場合も少なくないのである。報告を終えた遺跡の必要性に応じて追跡し考察する、そのような成果を発表することはいつの時代においても必要とされるころと言えよう。

うわべの事象あるいは未消化な調査内容を都合良く揃え語る、理論考古学めいた風潮の独走に警笛を鳴らすのは、まさしく調査者による調査事例の分析研究であることは論を俟たないであろう。

このような経過をふまえ、今回初めての研究論集を発行することとした。その基本方針としては、自ら発掘調査を行った遺跡の中から神奈川県域という地域性（端的に言えば、山と川と海(湾)）をふまえた考古学的成果を、考古学研究というステージに止揚させるものとしたと思うのである。

第1号では自分も含めて12名の所員が論考を発表した。対象とする時代も所員それぞれの得意分野を選び、旧石器時代から中～近世までのほぼ全ての時代の神奈川の遺跡について取りあげることができた。本誌の誌名を「神奈川を掘る」とした所以でもある。本誌は不定期発行とするつもりでいるが、全所員が執筆に参加するべく、すでに第2号に向けての企画を開始していることから、ここしばらくは毎年発行することとなろう。

願わくば本研究論集の個々の地域研究が、小さいながら全国につながる研究の発火点となり得れば望外の幸せである。

2015年6月30日

玉川文化財研究所 戸田 哲也

目 次

麻生 順司	「相模川以西のナイフ形石器文化の一様相」 －秦野市太岳院遺跡出土の旧石器時代遺物とその編年的位置づけ－	1
戸田 哲也	「清川村 ^{すすがやにてんのう} 煤ヶ谷二天王遺跡に見るセトルメントパターン」 －縄文早期の集石土坑・陥し穴と出土遺物の分析－	17
石川 真紀	「真田・北金目遺跡群における押型文土器破片の分布の様相」 －相模川下流域西岸の押型文土器出土遺跡との比較から－	37
吉田 浩明	「多摩207型陥し穴の再考」	59
小森 明美	「神奈川県における最近の配石墓の事例について」	87
秋山 重美	「境川・柏尾川下流域の弥生時代後期集落跡について」 －藤沢市 ^{わたうち} 渡内遺跡・本在寺遺跡・二伝寺砦遺跡の検討－	107
太田 雅晃	「神奈川県内出土の古代鉄製釣針について」 －伊勢原市東大竹・市場遺跡第9地点出土の捻環頭釣針の資料紹介を通じて－	121
前川 昭彦	「成瀬第二地区遺跡群に見る古墳出現期集落の構造と変遷」	133
北平 朗久	「厚木市峯ヶ谷戸遺跡平安時代集落跡の検討」	147
香川 達郎	「中世鎌倉における合わせ口かわらけ埋納について」	161
小林 晴生	「伊勢原市丸山城址の発掘と城郭構造」	181
西本 正憲	「かわらけからカワラケへ」 －東相模における近世在地系かわらけと江戸系カワラケの受容と変容－	197